

## 卷頭言



# 行遠必自邇

とおきにいくにかならずちかきよりす

竹川佳寿子

教師が理科の授業で、太陽が地球を中心に戻るのか、地球が太陽を中心に戻るのか、を教えていた。すると生徒が「先生、それ試験にでるの」と聞いたら。「もちろん出るさ」と教師が答える。「先生それどっちが正しいの」

(週刊朝日)

この例にみられるような、過程は問題にせず、結果のみを重視するという思考、近い将来にのみ役立つと思われるものの、しかも未熟な段階にそう考へるものだけを学べばよいという性急な考え方がある人々の間に最近目にみてふえてきているように感じられる。若者たちは多少異なっていても、若者は、いつの時代においても、素直な吸収力を持ち、無限の可能性を持った存在だと思っていて、現象的にあらわれる若者像は多少異なっていても、若者は、な考え方のなかで若者が成長していくことが気がかりでならない。

大きな花を咲かせるためには、肥えた土に、まずその根をしっかりと張つていなければならぬし、遠くへ矢を放つためには、十分に弓をひいておかなければなるまい。「中庸」に「遠きに行くに必ず邇きよりす……」という文がある。諸橋轍次博士の説明によれば、これは「遠いところに行かんとする者は、必ず近いところから第一歩をはじめる。なにをするにも順序がある」ということを述べたものであるという。

「高きに登るに必ず昇きよりするが如

し」とつづく文をみれば、なお一層文意は明らかである。「中庸」のこの文を引用するまでもなく、近いところから、低いところから、地道に積みあげて目標に近づくということは当たり前のことと思われるのに、若者の間に、先をいそぎ過程を省略したがる傾向をみなければならないようになったのは何故であろうか。

それには、おそらく効率の良さを至上のものとし、繁榮をひたすら追い求め走りつづけてきた社会風潮、その風潮に適合的な人間造り等が無関係ではあるまい。このままいくと、しだいに過程を軽んじ、安易に結果のみを求めて、ものを考へる力を失つた若者がふえていくのではないだろうか。

教えられたことはよく覚えるが、新しいものを生みだす力は持てない、創造力に欠けた、その意味で無気力な若者が造りだされていく、結局は社会全体が活力を失うことになるのではないだろうか。

未来を託された若い人たちが、その可能性を枯らすことなく、伸びのびと創造力を育て、ゆたかに大きな花を咲かせていくよう、そのための土台づくりに、ささやかながら手をさしのべたいというのが、私の教師としての小さな願いである。

(たけかわ かずこ・福島県立医科大学  
学教授)